

「の（だ）」構文に対応する世界の諸言語の構文

— 今後の「の（だ）」構文研究の可能性を求めて —*

大竹 芳夫 言語教育講座

キーワード: 名詞節化, 「の（だ）」構文, It is that 節構文, Det är som 構文, 「是...的」構文

1. はじめに

日本語の名詞節化詞「の」に関する先行研究は数多い。しかしながら、統語構造、情報構造、文法範疇、機能的特性、認知的基盤などに関して、個別言語の壁を越えた統一的な視座からの比較対照研究は十分に行われてきたとは言えない。さらに言えば、名詞節化形式を含む他言語の構文についても、形式と意味・機能の関係を見据えた記述的、理論的研究は十分に進んではいない。本研究では、名詞節化詞「の」を伴う「の（だ）」構文と対応する英語構文の諸特性の異同を概観し、英語以外の世界の諸言語における同種の構文を示しながら、今後の研究課題と発展の展望を記述する。

2. 「の（だ）」構文と英語の諸構文の対応

日本語と英語を通して心に映る世界はそれぞれに異なる。そのため、同じ事象を言葉で表現するとき、日本語と英語とでは違った形を選ぶことになる。大竹 (1999a, 2003b, 2007a, 2007b), Otake (2001b, 2001c, 2002a) では、日英語の名詞節化の形式と意味・機能がどのようなメカニズムで取り結ばれているのか、「の」による名詞節化と英語の指示表現 *it* や *that* の選択が情報の既定化にどのように関わっているのかについて理論的、記述的に論じた。具体的には、*it* の指示性に関する最近の意味論研究や語用論研究の成果、さらには日本語の「の」節との比較検証を踏まえて、「の（だ）」構文に対応する英語構文の構造の同定や意味・機能の解明を試みた。「の（だ）」構文に対応する英語構文はひとつではない。それは、「の（だ）」構文で表現される事象が、英語ではさまざまに切り取られて言語化されることを裏付けている。本節では大竹 (1999a, 2003b, 2007a, 2007b), Otake (2001b, 2001c, 2002a) で得られた「の（だ）」構文と英語の諸構文の対応に関する知見を概説する。

第一に、発話場面で瞬間的に知覚された事態の同定を表す「の（だ）」構文には、小節を補文に選択する(1a)のような *S be NP V-ing* 構文が十全に対応する。

- (1) a. “Isn’t that *Lazy Lazlo walking*?”
b. 「あれはLazloのやつが {歩いているんじゃないか / *歩いていないか} ?」

* 本研究は、平成 18-20 年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 (C) 課題番号 18520377 「日英語における名詞節化形式と意味・機能の関係に関する実証的・理論的研究」(研究代表者: 大竹芳夫) の研究成果の一部である。

一方、先行情報の論理解釈や事の真相・実情の同定といった認識レベルで把握できる情報を伝える「の(だ)」構文には、that節を補文に従える(2a)のようなS be (that)節構文が対応する。特に、(3a)のようにitを主題に据えるS be (that)節構文をIt is that節構文と呼ぶことにしよう。

- (2) a. I've got a bit of a problem. The thing is, *all the banks are closed*.
b. ちょっと困ったなあ。実は、銀行が全部{閉まっているんだ / *閉まっている}。
- (3) a. He was shot in his house. *It is that* he knew too much.
b. 彼は自宅で撃たれた。彼は知りすぎていたのだ。

S be NP V-ing構文とS be (that)節構文の意味的相違は構造上の相違から説明される。つまり、S be NP V-ing構文のNP V-ingは独立した時制をとらず主節に依存して存在するため、主語Sが指す事態の同定は、知覚レベルでその事態の存在の確認と瞬間同時的に行われる。一方、S be (that)節構文は主節と補文が独立した時制をとり得ることから、たとえ進行相が補文内に生じていてもその時間は主節のコピュラbeが表す瞬間的同定時とは全く同時ではない。そのため、S be (that)節構文は、先行情報や当該状況の真相、実情の同定、論理的解釈といった「知覚的」にはとらえがたい情報を提出することとなる。「の(だ)」構文は、こうした認知と知覚を区別せず、話し手の知識にすでに取り込まれている情報であることを積極的に表現するという意味特性をもつ。¹⁾

第二に、先行情報や現況を同定するとき、主題表示が随意的である日本語は「の」、「こと」、「もの」、「わけ」といった多様な名詞節化詞を活用しながら補文命題の情報特性を表現できる。それに対して、英語は指示表現itを用いることで補文命題の既定性を積極的に表現するという相違を示す。たとえば、相手の謝罪や感謝の言葉に対する応答表現として頻用される(4)のような“{*That / It*}’s all right.”と「礼には {及ばないですよ / 及ばないんですよ}。」の談話内での棲み分けの背後のメカニズムを考えよう。

- (4) a. “Thank you for all your help.” “{*That / It*}’s all right.”
b. 「助けていただき、ありがとうございます。」「礼には {及ばないですよ / 及ばないんですよ}。」

主題にitを選択する(4a)のようなIt be 形容詞句の構文と(4b)のような「の(だ)」構文は、いずれも発話に先立って話し手の評価判断が内心で定まっていることを積極的に表現し、同様の語用論的機能を発揮する。大竹(1997)では、相手の謝罪や感謝に対して用いられる“*That’s all right.*”と“*It’s all right.*”を取り上げ、それぞれの存在理由をthatとitの指示特性に基づいて考察を加えた。基本的には指示対象の情報が話し手にとって新獲得情報であるか既獲得情報であるかによってそれぞれが選択される。しかし、現実の場面では、眼前で生じたばかりのことがらであるにもかかわらず話し手は評価内容を既定化するためにitで指示して既獲得情報として表示することがある。これは、実情は相手の謝罪や感謝の対象

¹ S be NP V-ing構文とS be (that)節構文の特性の詳細については大竹(1994a,1994b,1995,1996,2001d,2002c,2006a,2006b), Otake(1998a,2002a)を参照のこと。

が話し手からみて新獲得情報であっても、意図的にitを用いて既獲得情報であることを表示することで、相手の不安や心理的負担を解消、軽減する話し手の考慮の表れであることを述べた。日本語の「の(だ)」構文も、名詞化詞「の」による評価内容の既定化により同様の語用論的効果をあげることについても検証した。つまり、英語では主題に選択される指示表現itがその指示対象の既定性を積極的に表現する。しかし、主題表示が随意的な日本語では、名詞節化の機能を果たす「の」が命題情報の既定化に貢献すると考えられる。さらに、先行情報の解釈を補文内に与える「の(だ)」構文に対応する(3a)のようなIt is that節構文の場合には、主題位置にitを立て先行情報を既定化する。また、ある命題内容を既定情報として理解に取り込む過程を開示する「の(だ)」構文に対応するS take it that節構文の場合には、後続するthat補文の命題内容をitで指示して既定化すると分析できる。(5a), (6a)はS take it that節構文の例である。

- (5) a. I *take it that* you wanted something else.
 b. 君は他のものが欲しかったんだ。
- (6) a. “I *take it that* you don’t care for the sun?” they enquired silkily.
 b. 「あなたは日差しを気にしないんですね？」と彼らはやさしく聞いた。

従来の研究ではS take it that節構文はthat節を指す形式目的語itをtakeが従える構文であると分析されるにとどまってきた。その結果、なぜtakeがthat節を目的節として直接従えず、itを介して後接する労力を費やすのかが問われることはなかった。大竹(2003a,2004)では、S take it that節構文のitは後続するthat補文の命題内容が既定情報であることを積極的に合図する指示機能に着目した。そして、主語の指示対象が何らかの根拠を抛りどころに、that節内の命題内容を既定情報として理解に取り込む過程を表現する構文であることを明らかにした。さらに、大竹(2007c)では(5a)のような下降音調を伴うタイプとは異なり、(6a)のような平叙疑問化されて上昇音調と文末の疑問符を伴うタイプは、「のだ」+「ね」と対応することを明らかにした。

第三に、疑問文の「の(か)」に対応する構文として、Which is it疑問文、Why is it that疑問文、How is it that疑問文を挙げることができるが、名詞節化詞「の」と指示表現itによる命題情報の既定化には類似点と相違点がある。(7a)はWhich is it疑問文、(8a)はWhy is it that疑問文、How is it that疑問文の例である。

- (7) a. So *which is it*: is there progress or isn’t there?
 b. それで、どっちなんだ? 進歩があるのか、それともないのか?
- (8) a. {*Why/ How*} *is it that* Mary is not happy?
 b. メアリーが幸せでないのはいったい{なぜ / どうして}なのか?

大竹(1998b,2002b)では、Which is it疑問文は、発話に先立ってその答えがどちらかにすでに定まっているものととらえたうえで、その答えを相手から聞き出そうとする状況で用いられること、「の(か)」を伴う選択疑問文と同様に状況によっては相手に事実を問い詰めたり、発言の矛盾を突くといった語用論的含意を帯びることを実証的に考察した。Why is it that疑問文、How is it that疑問文のitはthat節内に取り上げた事象を積極的に既定

表示する。そのため、*Why is it that* 疑問文、*How is it that* 疑問文の使用は、話し手がその取り上げた事象が不条理に成立している、あるいは矛盾をはらんでいるにもかかわらず現実に成立していると判断するような場合に厳しく制限されることも論じた。

第四に、接続表現「ので」と(9a)のような*now that*節、(10a)のような*in that*節を比較対照すると、原因や理由の意味を派生する日英語の言語化プロセスの相違が確認できる。

- (9) a. We can expect milder weather, *now that* spring is here.
b. もう春なので、穏やかな天候が期待できる。
- (10) a. We are fortunate *in that* we have really good kids to work with.
b. 本当にいい子たちと仕事ができるので、私たちは幸せです。

接続表現「ので」は「の(だ)」と同じ名詞節化詞の「の」を含むと考えられ、「ので」節の「の」と *now that* 節や *in that* 節の *that* は名詞節化する共通の機能を有する。しかしながら、「の」はそれ自体が命題情報の既定性を積極的に保証するのに対して、*that* は節内の情報の既定性を積極的に表示しない。大竹 (1999b,1999c,2000a,2000b,2000c,2001a)では、英語の *now that* 節は主節の情報を時間軸に位置付けることで、また *in that* 節は主節の情報を空間領域に位置付けることで *that* 節の情報が既定的に解釈され、「ので」と類似した意味を表現することを分析してきた。つまり、「ので」節と *now that* 節や *in that* 節が類似した因果関係の意味解釈を表現しても、それは時間と空間という異なる認知基盤に基づく言語化のプロセスを経ると考えられる。

上記の諸例が示すように、「の(だ)」構文に対応する英語の構文は多様である。しかしながら、これまでの研究においては、「の(だ)」構文の対訳として(3a)のような *It is that* 節構文がしばしば示されるにとどまっており、名詞節を補文に従えるという形式的な類似性にしか着目されてこなかった。cf. Kuno (1973), Kuroda (1973), 池上 (1981), 田野村 (1990), Lombardi Vallauri (1995), Tsubomoto (2000). また、*It is that* 節構文自体の形式、意味、機能についても解明の途にある。Otake (2002a)などの筆者の一連の論文では、収集した言語資料を観察しながら、可能な限り理論的、実証的に「の(だ)」に対応する英語構文の諸特性の解明を試みてきた。同時に、「の(だ)」構文と対応する英語構文を統一的な見地から比較検証することにより、「の(だ)」の本質により深く迫ることが可能となった。言い換えれば、従来は個別に論ぜられてきた英語と日本語の名詞節化形式について、両言語を共通の視点から比較対照しながら、認知や知覚の対象を言語化するプロセスの共通性と相違を原理的に明らかにしてきたと言えよう。次節では、英語以外の諸言語における「の(だ)」構文と同種の構文を観察し、今後の期待される研究の方向性を考察する。

3. 英語以外の諸言語における「の(だ)」構文と同種の構文

英語以外の諸言語における「の(だ)」と同種の構文を観察しよう。「の(だ)」構文に対応する英語構文のひとつである *It is that* 節構文とヨーロッパ諸言語における同種の構文に言及した研究に Delahunty (1990,2001)がある。Delahunty (1990)は(11)の *It is that* 節構文と同一の文脈環境に生ずる他言語の構文を示し、ドイツ語(=(12)), フランス語(=(13)), スペ

イン語(=(14)), イタリア語(=(15)), ハンガリー語(=(16))にも同種の構文が存在することを指摘している。

- (11) But behind the smile is a “We vs. Them” attitude that has set the whole tone for his Administration’s relations with the press. *It’s not that* he hates the press the way Nixon did, *it’s just that* he is insensitive to the press’ role in our society and sees the media generally as something to be manipulated, but not trusted. (Delahunty 1990)

(しかし、その笑顔の裏には政府と報道機関との関係に対する全体の雰囲気を作ってきた「われわれ対彼ら」という姿勢がある。彼はニクソン大統領のように報道機関を嫌っているのではない。彼はわれわれの社会における報道機関の役割に鈍感で、マスコミは概して信頼されるべきものではなく操作されるべきものであると考えているだけなのだ)

- (12) <ドイツ語>

Es ist nicht, dass er die Presse hasst, wie Nixon es tat. Es ist nur, dass er nicht feinfühlig gegenüber der Rolle der Presse in unserer Gesellschaft und das ser die Medien generell als etwas sieht, das manipuliert warden muss und dem man nicht trauen kann. (*ibid.*)

- (13) <フランス語>

Ce n’est pas qu’il deteste la presse comme Nixon, c’est seulement qu’il est insensible au rôle de la presse dans notre société et considère en général les medias quelquechse à manipuler mais pas quelquechse à quoi se fier. (*ibid.*)

- (14) <スペイン語>

No es que odie la prensa como Nixon, es que insensible a la función de la prensa en nuestra sociedad y, por lo general, medio como algo para ser pero no digno de la confranza. (NB. No overt subject in matraix.) (*ibid.*)

- (15) <イタリア語>

Non é che lui odi la stampa come Nixon, é solo che é insensibile al ruolo della stampa nella nostra societá, e in generale considera I mezzi di comunicazione como qualcosa da manipolare non qualcosa su cui contrare (NB. Again no overt subject in matrix.) (*ibid.*)

- (16) <ハンガリー語>

Nem mintha gyúlölné a sajtót ahogy Nixon tette, csak éppen erzéketlen a sajtó társadalmi szerepe iránt, általában úgy tekinti a hírközlést mint valamit amit manipulálni lehet, de megbízni benne nem. (NB. The matrix contains neither a subject nor a copula, but the clause is subordinate in form.) (*ibid.*)

(12)-(16)のヨーロッパ諸言語において、英語の *It is that* 節構文と対応する構文を抽出して整理すると次のようになる。

(17) 英語	It is that	e.g. <i>it's just that</i> he [...].
ドイツ語	Es ist, dass	e.g. <i>Es ist nur, dass</i> er [...].
フランス語	Ce est que	e.g. <i>c'est seulement qu'il</i> [...].
スペイン語	φ Es que	e.g. <i>es que</i> [...] <i>la</i> [...].
イタリア語	φ È che	e.g. <i>é solo che</i> [...].
ハンガリー語	φ φ mintha	e.g. <i>Nem mintha</i> [...].

Delahunty (1990)は(17)に示すように、It is that 節構文と形式的に対応し、同一の文脈環境に生ずる構文として、ドイツ語の“Es ist, dass”構文、フランス語の“C'est que”構文を挙げている。また、Delahunty (1990)が(14)-(16)で注記しているように、スペイン語の“Es que”構文とイタリア語の“È che”構文は主節主語を欠くが It is that 節構文に対応する。ハンガリー語は主節主語要素とコピュラを欠き、Not that 節構文に対応すると思われる“Nem mintha”の形式が存在する。Delahunty (1990)はスペイン語やイタリア語は動詞の語形から人称や数がわかるため主語が生じない可能性や、ハンガリー語の“Nem mintha”の構文と英語の Not that 節構文の類似性を追及してはいない。また、it の指示特性や、小節と that 節の補文選択について着目してはいないが、「の (だ)」構文に対応する構文のひとつである It is that 節構文に類似する構文が他言語にも普遍的に見られることを観察している。ヨーロッパの個別言語研究として、フランス語の“C'est que”構文の談話標識機能に着目する Pusch (2006)や、スペイン語の“Es que”構文の意味を説明する España (1996)などがあり、英語の It is that 節構文との異同を視野に入れながらそれぞれの言語の個別性が明らかにされつつある。しかし、日本語の「の (だ)」構文も射程に入れながら、世界の諸言語の対応構文の特性を解明する試みは解明の緒についたばかりであるように思われる。

たとえば、Rosenkvist (2007)は Otake (2002a)の研究成果を引用しながら、It is that 節構文及び「の (だ)」構文と(18)のような南部スウェーデン語の同種の構文との意味・機能の類似性について考察している。

(18) <南部スウェーデン語>

Det är som jag inte är tillräckligt snygg.
(Lit.) it is som I not am enough pretty

(Rosenkvist 2007)

(私はあまりかわいくないのだわ)

Rosenkvist (2007)は南部スウェーデン語の“Det är som”構文を観察し、Otake (2002a)で指摘した「の (だ)」構文やIt is that節構文と類似した意味特性を有することに着目している。

2) つまり、南部スウェーデン語の“Det är som”構文も、「の (だ)」構文やIt is that節構

² Rosenkvist (2007)は、筆者が平成13年度文部科学省在外研究員派遣(米国ハーバード大学言語学科客員研究員)の際にHUMIT 2001 MIT-Harvard University Conference on Language Study(2001年9月、於:米国マサチューセッツ工科大学)において口頭発表した“Semantics and Functions of the *It is that*-Construction and the Japanese *No da*-Construction”のハンドアウトに基づき、「の (だ)」構文と南部スウェーデン語の“Det är som”構文を比較対照している。Otake (2002a)は同口頭発表ハンドアウト及び原稿に大幅な加筆修正を施したものである。

文と同様に、先行情報について聞き手には容易には知りたいが話し手の念頭ではすでに成立しているような情報を伝達するとRosenkvist (2007)は分析している。さらに、Rosenkvist (2007)はOtake (2002a)で確認した「の(だ)」構文とIt is that節構文に共通する語用論的効果に言及し、“Det är som”構文も「相手を教え諭したり、理屈を説いたり、無知をあげつらう」ような含みを派生し得ること、そうした聞き手に情報を押し付ける含意を積極的に回避するために“bathe”(=just, only)をしばしば伴って発話されることを観察している。Rosenkvist (2007)は本論文で考察してきたような「の(だ)」構文に対応する構文を網羅的に取り上げて分析してはいないが、南部スウェーデン語の“Det är som”構文をIt is that節構文のみならず「の(だ)」構文も含めて比較対照することでその普遍性と個別性を解明しようとする姿勢は高く評価できる。³⁾

さて、アジアの諸言語にも「の(だ)」構文に対応する構文が存在する。まず、韓国語においては、形式名詞「것」と、「だ」に相当する「이다」から成る「것이다 (=kes-ita)」が「の(だ)」構文と形式的な対応を示す。金 (2007)は、韓国語の「것」は「もの」、「こと」、「の」などに対応する形式名詞であると説明し、「것이다 (=kes-ita)」と「の(だ)」構文の意味と機能の比較対照を行っている。金 (2007)によれば、「것이다 (=kes-ita)」と「の(だ)」は(19)のように「先行文脈と関連付けて「説明・理由」を表す場合には両者が対応する傾向が見られた」が、(20)のように会話において「話し手」が話し手自身の私的領域に関する情報を「聞き手」に述べる場合」には「の(だ)」とは異なり「것이다 (=kes-ita)」の使用が不自然になると指摘している。

- (19) Emma-nun taytapha-cianh-ass-ta. Sasiltaylo malha-camyen emma-nun cikum nemuto pwulanhay-ssten-kes-ita.

(ママは答えなかった。本当のことを言うとママは今とても不安だったのだ)

(金 2007)

- (20) a. 僕，大阪から来たんだ。

b. Na-n osakha-eyse wa-ss-e.

(私，大阪から来た)

(*ibid.*)

また、崔 (2006)は「の(だ)」構文と「거든 (=geoduen)」の対応も指摘している。「の(だ)」構文に対応する韓国語の研究は着実に進みつつあるが、英語構文も比較対象とした研究は本格的に行われていないように思われる。中国語に目を向けると、「の(だ)」構文に対応する構文として「是...的(=shi ... de)」構文がある。

³⁾ 日本語学の立場から文末表現の「の(だ)」を考察した野田 (1997)では、対応する英語構文を論じた大竹 (1994a, 1995)の研究成果が言及されている。

- (21) a. 电视坏了。是小孩子淘气鼓弄坏的。
 (テレビが壊れました。子供がいたずらして壊してしまったのです)
 b. 她的脸涨得通红，是让她的学生们气的。
 (彼女の顔が真っ赤になっていた。生徒たちのことをおこっていたのです)
 (郭 2003)

「是...的」構文の「是」は主題表現であり、「的」は「の」に対応する一面をもつ助詞である。「是...的」構文と「の(だ)」構文との意味や機能面の類似性と個別性が、最近の研究により次第に明らかになりつつある。cf. 杉村 (1995), 郭 (2003), 魏 (2005). なかでも魏 (2005)は「是...的」構文と「の(だ)」構文を詳細に比較対照し、次のような事実観察に基づき「是」も「的」もモダリティを表す語であると分析している。

- (22) a. 熱がある。風邪を引いたのだ。 → 发着烧。(是)感冒了。
 b. 風邪を引いた。熱があるのだ。 → 感冒了。发着烧呢。
 c. 風邪を引いた。雨にぬれたのだ。 → 感冒了。(是)被雨淋的。
 (魏 2005)

魏 (2005)によれば、(22a-c)が示すように、「の(だ)」構文は「是...的」構文のみならず別の中国語の構文にも対応するという。(22a)では助詞「了」が用いられ、(22b)では「是」も「的」も「了」も用いられず、(22c)では「的」が用いられている。また、魏 (2005)は(22a)、(22c)のような文脈では主題要素「是」が「モダリティを表す副詞的な性格」になり、「事実を叙述し、原因を説明する」という働きをもつと述べている。こうした主題要素「是」の副詞への格下げや省略現象は、Otake (2002a)で考察した英語の“the fact is”や日本語の「実際(は)、事実(は)」などが格下げを受ける現象と共通しているし、英語の *Just that* 節構文(=(23a))や *Not that* 節構文(=(24a))の主題要素“it”+コピュラ部が省略される現象と類似しているように思われる。

- (23) a. “What do you know about Site B?” [...] “Nothing. *Just that* Dr. Levine was looking for Site B. And it was the name in the files.”
 (M.Crichton, *The Lost World*)
 b. 「Site Bについて何を知っているのだ？」 [...] 「何も知りません。ただ、Dr. LevineがSite Bを探していたので。そして、それはそのカルテに記載されていた名前だったのです。」
 (24) a. Where were you last night? *Not that* I care, of course.
 b. あなたは昨夜どこにいたのですか？もちろん気にしているではありませんが。

このように、「の(だ)」構文に対応する構文は世界の諸言語に存在し、意味や機能において類似した特性を示す。日本語は補文命題の既定性を表出するために名詞節化詞「の」、「こと」、「もの」、「わけ」などを発達させてきた。たとえば、「の」節と「もの」節とでは既定化を

受ける情報の質が異なる。森田 (1989)は、(25)の例を挙げて「もの (だ)」は「その事物や事態などに対しての意見や意向は、話し手の自由な評価や判断を超えた一般論として示される。普遍的な結果や、習性や、自然の傾向、社会的な慣習など、話し手の判断以前のルール・しきたり・常識の例が「ものだ」には多い」と説明する。

- (25) a. 殿様の鎧は立派なものだ。
b. 良薬は口に苦いものだ。

(森田 1989)

森田 (1989)では「もの (だ)」と「の (だ)」の実質的な比較は行われていない。「の (だ)」は「もの (だ)」とは異なり、話し手の念頭に成立している命題情報を解釈として表現する。そのため、「もの (だ)」を「の (だ)」で書き換えると、聞き手には容易には知りたい実情や解釈を表現することになる。(26)が示すように、話し手だけが知り得るような真相や内実を聞き手に披瀝する副詞表現「実は」は「の (だ)」構文とは共起できるが、すでに常識やしきたりとして普遍的に認められているようなことがらを表現する「もの (だ)」構文とは共に生じがたい。

- (26) a. 実は、殿様の鎧は {立派なんだよ / ??立派なもんだよ}。
b. 実は、良薬は口に {苦いんだよ / ??苦いもんだよ}。

また、話し手が経験したばかりの事態を解釈し、内心で納得するようなときに発せられる表現「ははあ」は「の (だ)」構文とは馴染むが、「もの (だ)」構文とは共に用いられない。

- (27) a. ははあ、殿様の鎧は {立派なんだ / ??立派なもんだ}。
b. ははあ、良薬は口に {苦いんだ / ??苦いもんだ}。

本節で考察してきたように、名詞節化詞が補文命題の既定性を表出する日本語や韓国語のような言語や、補文形式のみならず指示表現の特性を活用しながら既定性を積極的に合図する英語、フランス語、ドイツ語のような言語など、既定性の保証過程が言語により異なることが確認できる。

4. まとめ

日本語の談話で頻用される「の (だ)」は外国人学習者にとって習得しがたいとしばしば指摘される。実際に、英語や中国語を母語とする留学生の日本語のエラーには「の (だ)」の使用に問題がある場合が観察される。非日本語母語話者にとって「の (だ)」構文の習得が難しいのは、本研究で考察したように既定性の保証過程が言語間で異なるからであると考えられる。今後は、大規模コーパスを活用ながら「こと」、「もの」、「わけ」による名詞節化、英語以外の東西の諸言語における名詞節化形式を実証的に分析することにより、情報の既定化という言語現象の解明を通して、人間の認知能力と言葉の研究を進めてゆきたい。

References

- Declerck, Renaat (1992). The Inferential *It is that*-construction and Its Congeners. *Lingua* 87, 303-330.
- Delahunty, Gerald Patrick (1990). Inferentials: the Story of a Forgotten Evidential. *Kansas Working Papers in Linguistics* 15: 1, 1-28. Lawrence: Linguistics Graduate Student Association, University of Kansas.
- Delahunty, Gerald Patrick (2001). Discourse Functions of Inferential Sentences. *Linguistics* 39: 3, 517-545.
- España, Margarita Villasante (1996). Aspectos Semántico-Pragmáticos de la Construcción *es que* en Español. *Dicienda. Cuadernos de Filología Hispánica*. 14, 130-147, Madrid: Universidad Complutense de Madrid.
- 魏之涛 (2005). 「説明のモダリティに関する中日対照研究: 「～のだ」と「“是～的”句」を例として」
精華大学日本語学科卒業論文. [2005 年度日中友好中国大学生日本語科卒業論文コンクール参加論文]
(http://oaps.lib.tsinghua.edu.cn:8080/dspace/bitstream/123456789/256/1/064_魏之涛_2001013036.pdf)
- 池上嘉彦 (1981). 『「する」と「なる」の言語学—言語と文化のタイポロジーへの試論—』 東京:大修館書店.
- 郭穎侠 (2003). 「“是 ... 的”構文の焦点と時制の問題」『現代社会文化研究』第 27 号, 215-232. 新潟:新潟大学大学院現代社会文化研究科.
- 金廷珉 (2007). 「日本語の「のだ」と韓国語の「KES-ITA」の意味に関する対照研究」『東北大学高等教育開発推進センター紀要』第 2 号, 123-133. 仙台:東北大学高等教育開発推進センター.
- Kuno, Susumu (久野暉) (1973). *The Structure of the Japanese Language*. Cambridge, Massachusetts: MIT Press.
- Kuroda, Shige-Yuki (黒田成幸) (1973). Where Epistemology, Style and Grammar Meet. In Anderson, Stephen R. & Paul Kiparsky (eds.), *A Festschrift for Morris Halle*, 377-391. New York: Holt, Rinehart & Winston Inc.
- Lombardi Vallauri, Edoardo (1995). Theme-Rheme in the Japanese Complex Sentence. *Linguistics* 33, 1025-1041.
- 森田良行 (1989). 『基礎日本語辞典』 東京:角川書店.
- 野田春美 (1997). 『「の(だ)」の機能』日本語研究叢書 9. 東京:くろしお出版.
- 大竹芳夫 (1994a). 「It is that 構文に関する意味論的, 語用論的考察」『英語語法文法研究』創刊号, 117-131. 英語語法文法学会.
- 大竹芳夫 (1994b). The *Not that*-Construction in English. 『言語文化論集』第 39 号, 37-55. つくば:筑波大学現代語・現代文化学系.
- 大竹芳夫 (1995). 「解釈と換言: It is that 構文と That is 構文の意味と機能について」『言語文化論集』第 40 号, 137-157. つくば:筑波大学現代語・現代文化学系.
- 大竹芳夫 (1996). 「It is that 構文の構造: 分裂文説の批判的検証を中心として」『言語文化論集』第 42 号, 145-165. つくば:筑波大学現代語・現代文化学系.
- 大竹芳夫 (1997). 「指示と情報: That's all right と It's all right を中心として」『信州大学教育学部紀要』第 91 号, 61-72. 長野:信州大学教育学部.
- Otake, Yoshio (大竹芳夫) (1998a). Some Constraints on Modal Auxiliaries in the *It is that*-Construction. 『信州大学教育学部紀要』第 95 号, 69-78. 長野:信州大学教育学部.

- 大竹芳夫 (1998b). 「Why is it / How is it 疑問文の意味と機能に関する実証的考察」『英語語法文法研究』第 5 号, 95-110. 英語語法文法学会.
- 大竹芳夫 (1999a). 「日本語の「のだ」文と対応する英語構文の特性: 「のだ」文と S is {NP V-ing / (that) NP VP} の普遍性と個別性」『信州大学教育学部紀要』第 96 号, 111-122. 長野:信州大学教育学部.
- 大竹芳夫 (1999b). 「空間領域と情報の認知: 英語の in that 節の意味と機能」『信州大学教育学部紀要』第 98 号, 19-30. 長野:信州大学教育学部.
- 大竹芳夫 (1999c). 「Now that 節の意味と接続機能」『英語語法文法研究』第 6 号, 83-97. 英語語法文法学会.
- 大竹芳夫 (2000a). 「時間の流れと状況の連関: 英語の now that 構文が表す状況の連続」『信州大学教育学部紀要』第 99 号, 33-43. 長野:信州大学教育学部.
- 大竹芳夫 (2000b). 「基準を表す情報: 日本語の「で」と「ので」及び対応する英語の接続表現の意味と機能」『信州大学教育学部紀要』第 99 号, 45-56. 長野:信州大学教育学部.
- 大竹芳夫 (2000c). 「点として捉えられる情報: 日本語の「という点で」及び対応する英語表現の特性」『信州大学教育学部紀要』第 100 号, 27-35. 長野:信州大学教育学部.
- 大竹芳夫 (2001a). 「時間と空間認知に基づく接続表現: Now that / In that 節と「ので」節の意味と機能」中右実教授還暦記念論文集編集委員会(編)『意味と形のインターフェース』下巻, 797-809. 東京:くろしお出版.
- Otake, Yoshio (大竹芳夫) (2001b). Some Properties of the NP + *be* + Nominal Clause Constructions: the *It is that*-Construction in English and the *No da*-Construction in Japanese. 『信州大学教育学部紀要』第 103 号, 93-104. 長野:信州大学教育学部.
- Otake, Yoshio (大竹芳夫) (2001c). Application of Linguistic Knowledge to English Teaching: from the Viewpoint of Recent Semantic and Pragmatic Studies. *JABAET Journal*, Vol. 5, 87-105. 日英・英語教育学会.
- 大竹芳夫 (2001d). 「That is that 構文の意味と機能に関する実証的考察」『信州大学教育学部紀要』第 104 号, 67-75. 長野:信州大学教育学部.
- Otake, Yoshio (大竹芳夫) (2002a). Semantics and Functions of the *It is that*-Construction and the Japanese *No da*-Construction. In Ionin, Tania, Heejeong Ko & Andrew Nevins (eds.), *MIT Working Papers in Linguistics*, Vol. 43. 143-157. Cambridge, Massachusetts: MIT, Department of Linguistics, and Philosophy.
- 大竹芳夫 (2002b). 「Which is it 疑問文の意味と用法」『信州大学教育学部紀要』第 105 号, 63-73. 長野:信州大学教育学部.
- 大竹芳夫 (2002c). 「英語の it's just that 構文に関する実証的考察」『信州大学教育学部紀要』第 107 号, 89-100. 長野:信州大学教育学部.
- 大竹芳夫 (2003a). 「英語の take it that 節構文の意味と談話機能」『信州大学教育学部紀要』第 108 号, 69-80. 長野:信州大学教育学部.
- 大竹芳夫 (2003b). 「It is that 節構文の意味と談話機能: 「のだ」文との比較・対照」『英語青年』第 149 巻第 7 号, 436-437, 443. 東京:研究社出版.
- 大竹芳夫 (2004). 「S+take+it+that 節構文の意味と談話機能」『英語語法文法研究』第 11 号, 英語語法文法学会(編). 79-93. 東京:開拓社.
- 大竹芳夫 (2006a). 「既定の場面的状況と人物の存在認知: 英語の it+is+名詞句構文の意味特性」『信州大学教育学部紀要』第 117 号, 37-48. 長野:信州大学教育学部.

- 大竹芳夫 (2006b). 「言語資料の観察に基づく文法研究：現代英語表現の諸相」『信州大学教育学部紀要』第 117 号, 49-60. 長野:信州大学教育学部.
- 大竹芳夫 (2007a). 「日英語の名詞節化構文の意味と機能：{It is that /S take it that}節構文と「のだ」構文」溝越彰・小野塚裕視・藤本滋之・加賀信広・西原俊明・近藤真・浜崎通世(編)『英語と文法と』63-75. 東京: 開拓社.
- 大竹芳夫 (2007b). 「既定情報の否定：英語の{It is not that / Not that}節構文と「のではない」構文」『信州大学教育学部紀要』第 119 号, 91-102. 長野:信州大学教育学部.
- 大竹芳夫 (2007c). 「日英語における情報の既定化：英語の S take it that 節構文と「のだ(よ)ね」構文」『信州大学教育学部紀要』第 119 号, 103-111. 長野:信州大学教育学部.
- Pusch, Claus D. (2006). Marqueurs Discursifs et Subordination Syntaxique: La Construction Inférentielle en Français et dans d'autres Langues Romanes. In Drescher, Martina. & Barbara Frank-Job (eds.), *Les Marqueurs Discursifs dans les Langues Romanes: Approches Théoriques et Méthodologiques*. 173-188. Frankfurt: Peter Lang.
(www.romanistik.uni-freiburg.de/pusch/Download/construction_inferentielle.pdf)
- Rosenkvist, Henrik (2007). An Introduction to the South Swedish Apparent Cleft (SSAC). In Bentzen, Kristine & Øystein Alexander Vangsnes (eds.), *Scandinavian Dialect Syntax 2005*, Special Issue of *Nordlyd – Tromsø University Working Papers in Language and Linguistics*. Vol. 34. 239-250. Tromsø: The University Library of Tromsø.
- 崔真姫 (2006). 「「のだ」と「것이다」・「거든」の対応関係」『日本語文学』第 34 輯, 171-190. 韓国日本語文学会.
- 杉村博文 (1995). 「中国語における動詞句・形容詞句の照応形式」『語学研究大会論集』3, 51-66. 東京: 大東文化大学語学教育研究所.
- 田野村忠温 (1990). 『現代日本語の文法 I : 「のだ」の意味と用法』 大阪:和泉書院.
- Tsubomoto, Atsuro (坪本篤朗) (2000). Bare Subject Inversion Constructions in Japanese. In Takami, Ken-Ichi (高見健一), Akio Kamio (神尾昭雄) & John Whitman (eds.), *Syntax and Functional Explorations in Honor of Susumu Kuno*, 249-274. Tokyo: Kuroshio Publishers.

